

ウルフガイ

漫画原作原稿

第1回

平井和正



その女教師の名は、青鹿晶子といって、まだ若く、しかも美人だった。ほっそりした身体つきは、名前の通り可憐な牝鹿を想わせた。女教師というより、どう見ても女子大生といったところだ。まだ世の中に自信がなく、ちよっとオドオドしているという印象だ。

もちろん、これはほんの見せかけで、後になると、顔に似ぬすっかり者とわかったが、だいたい女なんてそんなものだ。

世の中には、一度しか顔を見ていないのに、妙に忘れられない人間がいる。好き嫌いにかかわりなく、強烈な印象が残って、へんに気がかりでたまらない。

一目惚れというのがある。また一目見ただけなのに、虫唾が走り、遠くにいるのにわざわざ殴りにでかけたくなることもある。

で、青鹿晶子の場合は前者に近いし、三人組の高校生にとつては、まぎれもなく後者だったというわけだ。

場所は、新宿盛り場、時刻は午後五時ごろ、登場人物は、前記した四人と、問題の少年、犬神明　つまり、このおれだ。

高校生三人組は、他校生からの迫害を防衛する会というチンケな連中で、手っとり早くいうと、攻撃は最良の防禦なりというわけで、ゆすりたかりを仕事とする非行少年グループだ。脂ぎったニキビだらけの、凶悪で不逞な顔をした奴らである。

いまは、ほかならぬおれが、彼らの餌食だった。

青鹿晶子についていえば、彼女は単なる通りすがりにすぎなかった。また、この時点では、ふたりとも面識がなく、彼女はおれが自校の生徒だということも知らなかった。おれは彼女の奉職する学校に転入の手続きをすませただけで、実際には顔を出していなかったからである。

状況を説明する。

三人組の非行高校生は、いわばプロであって、暴力行為には場慣れしている連中だったので、人目の多い盛り場でききなり凶悪なことをやりはじめたわけではなかった。

前後左右を取り囲むと、いかにも親密そうに、第三者には仲間としか見えない友情にみちたそぶり、肩に手などまわし、うるたえている犠牲者を、人目につかぬ建物に囲まれた路地などに連れこんでから、やおら牙を剥く。実に巧妙な手際だ。

青鹿晶子は、学校教師という職掌柄、彼らの意図に勘づいたのだった。彼女が後を尾けてきたのは、おれを奴らの魔手から救うためだったようだ。余計なお節介というほかはない。

「ズラかろうつたつてむだだぜ」

奴らはせせら笑うように、おれに宣告した。

「逃がしやしねえからよ」

奴らは、おれに身体を押しつけるようにして歩いた。ポケットのなかで凶器を握っているように見せかけていた。

おれは別に気にしなかった。いってみれば、狼がスピッツみたいなチビ犬どもに喧嘩を売られたようなものだからだ。

おれが気にしているのは、巧みに後を尾けてくる女子大生みたいな若い女の方だった。

高架線のガードをくぐりぬけて、周囲に人影がなくなる
と、奴らは豹変した。

「用はわかつてるだろうな……」

「たぶんな」

答えたとたん、おれは殴り倒されていた。凶器は短く切った鉛管らしい。尾行してくる女に気をとられていたためだ。もつとも、不平をいうほどの打撃でもなかった。つづいてこめかみに靴先がぶちこまれた時もそうだ。おれは時々やたらにタフになって、こまかいことは気にしないのだ。おれは胸ぐらを掴まれ、ぐいとひき起された。

「あんたたちが、金を巻きあげたがってるのか、それともおれのつらが気に食わないんで、はたこうとしてるのか、どっちだか当てようとしてたんだ」

おれはいった。だいたいにおいて、おれのセリフはキザなせい、他人を嚇つとさせるのがうまい。

「どうやら、その両方だな。金ならあるぜ」

おれは、ポケットから、一万円札の束を筒にして輪ゴムで止めたのを取りだして見せた。連中の眼が貪欲に光るのを見定めて、ポケットに逆戻りさせた。

「だが、両方というのは気に入らないんでね。どっちか一方だ」

「金をよこせ」

連中はかすれ声でいった。おれは首を横に振った。

「お断りだね。おれは、はたか、れる方に決めた。続きをやつたらどうだ？」

「この野郎、ふざけやがって……」

ふたりが両側からおれの腕をおさえ、ひとりがおれの身体の前面を襲った。歯を剥きだし、力いっぱい殴りつける。見かけは派手だが、たいしたパンチじゃない。

「そんな殴り方をすると、指をくじくぞ」

おれは冷やかにいった。「シロウトだ」

相手は顔に汗を光らせ、肩で息をしていた。なんともお粗末な体力だ。

くそつと呻くと、手がポケットに入った。スイッチ・ナイフが鳴って、白い凶暴な光が弾けてた。ナイフを誇示しながら、鋭い切先を、おれの腹の中央に押しあてた。

「こ、これでも、でかい口をたたく気がよ……ズブツと行くぜ、ズブツと……」

元気がでてきた。ナイフを手にすると勇気が湧いてくるのだ。

「生命が惜しかったら、金をよこせ」

「今度は強盗か。どうでもいいが、シャツを破かないでくれよ。買ったてなんだ」

「うるせえ……金をよこせ」

そいつは汗を流し、喘ぎながら、おれの内ポケットに手を伸ばしてきた。

そのとき、女の叫び声がひびきわたった。非行少年たちは雷に衝たれたような反応をしめした。ナイフを掴んだ手に、思わず力が入った。

ナイフの切先が、おれの腹の筋肉の間に滑りこんできた。非行少年はあわてて手をはなし、後退りした。ナイフは、おれの腹に突き立ったまま残った。

非行少年どもは、ジリジリとおれからはなれて行った。荒い呼吸をつき、滝のように冷汗を流し、声もなかった。

女が悲鳴をあげた。同時に恐慌に捉われた彼らは、弾かれたように逃げ去った。

旋風つむじかせのように連中が消え去ったあと、路地には、おれと青鹿晶子だけが残った。

「だ、だれか来て……だれか……」

女が喘いだ。はり裂けるばかりに眼が見開かれ、身体が烈しく震えていた。

その原因は、おれの腹に生えているナイフらしい。おかげでシャツが大なしだ。

「やめて！ 動かないで。いま、救急車が来るわ。それまでじっとしてるのよ」

青鹿晶子は声をふりしぼった。そうは行かない。みっともなくしてしかたがない。いくらやめてやめてと騒がれても

だ。

おれはナイフをひき抜いて捨てた。青鹿晶子は悲鳴をあげ、両手で眼を覆った。

「そんなことをしたら死んじゃうわよ、ああ……」

とうとう、その場へ坐りこんでしまった。

そこへ、間抜けなサイレンを鳴らして、パトカーが駆けつけてきた。こう騒ぎが本格的になると、こっちも居たたまれない。

おれは逃走することにした。女が腰を抜かしているうちに、高架線のコンクリート壁をよじのぼる。目にもとまらぬスピードで線路を横切った。

警察とのおつきあいは願いさげだ。とくに夜空に、円盤状の月が輝やいている間は。

どうして怪我人は怪我人らしく、ちゃんと振舞わないのかと、警察の連中に詮索されるわけには行かないのだ。

青鹿晶子とおれの再度の逢いは、学校が舞台になった。おれが今回、転入したのは、博徳学園という私立学校だ。それがどんな学校で、どんな教師と生徒がいようと、おれにはなんの関心もない。

学校無宿 と呼ばれるほど、転校をくりかえしてきたおれには、学校に対する一片の期待もイリュージョンもなか

った。所詮、仮の宿だからだ。

しかし、当の博徳学園にとっては、おれの転入はちょっとした問題だったらしい。どういうわけか、どこへ行ってもおれは、札つきの要注意人物で問題児なのだ。

おれは、青鹿晶子の担任のクラスへ編入されてしまった。おれの到来をひかえて、こんな光景があったらしい。校長室に、教頭と青鹿、それにカウンセラーの田所教師が呼ばれた席でのことだ。

「こりゃ、どうもたいへんな問題児のようですねあ」と、沢村という教頭が話の口火を切った。転出校からまわされてきた書類には、どうせろくなことは書かれていない。他との協調性がまるで欠如していて、暴力沙汰が絶えず、目上の者、つまり教師をすこしも尊敬せず、きわめて傲慢にして非礼な態度をとり、おまけに放浪癖があり、欠席日数が非常に多い。日常の生活態度きわめて不良。だいたいそんなところだ。いいところなしの欠陥児童だ。おれが教師に好印象を与えたためしがない。

「少年院送致になった記録でもありますか？」
と、カウンセラーの田所が訊く。

「いや、そういったことはないようです」
教頭はメガネを光らせて、書類をめくった。

「補導歴はかなりありますが、いや、どうも、たいしたタマですよ。やり方が実に巧妙なんですなあ。一度も家裁送りになつてないんですわ。喧嘩上手というのか、知能犯と

「いうのか、そこは実にうまく切りぬけてますよ。喧嘩の相手が死ぬような大怪我をしても、この犬神明という生徒は、責任を問われたためしがない……たとえばですよ、相手が刃物を抜いて切りかかってくる。犬神生徒は素手で逃げまわる。そのうちに、相手は自分の刃物で自分を傷つける、そんな結果に終る。つまり客観的に無過失で責任を問われずにすむという状況をつくりあげてしまってますな。その上、ちゃんと証人をつくることも忘れない抜け目のなさですわ。法律を味方につけることをよく知ってるんですな。いや、どうも、大人顔負けのテクニシャンですよ」

「かなり知能は高いようですね。学業成績のほうも、まずまず上の部……たしかに一風変わった生徒ではありますね」と、田所。

「それどころか、えらく口が達者で、どこでおぼえたのか、独学の法律論を吹きまくって、取調べの刑事やなにかをケムに巻くというんだから、恐れ入りますよ。どうも一筋縄じゃ行かん代物で」

「家庭環境は？」と、校長が質問する。

「両親は死亡。伯母が保護者になっています」

教頭は、家庭調査簿のカードに目をやる。

「欠損家庭ですな。道理で……保護者の山本勝枝という伯母は、たいへんな資産家らしいですよ。なんでもアメリカで、大きなレストラン・チェーンを持っているとかで……資産は十億だか二十億だか……」

校長は咳払いした。そんなことは百も承知だ。伯母は、博徳学園に二、三百万は寄付している。さもなければ、おれみたいな問題児を、すんなりと受け入れたはずはないのだ。

「ま、そんなことはどうでもよろしい。それより、こちらの受入態勢はどうなっていますか？」

「それはですね、いろいろ検討し、考慮した結果、こちらの青鹿先生のクラスに編入するということで……青鹿先生のクラスは、折よく定員以下ですし、教師としても、たいへん熱意があり、優秀な方ですので、適任だと思ひまして、そうとりはからいましたのですが、いかがでございますでしょうか、校長先生？」

「なるほど。しかし、青鹿先生のクラスには羽黒という生徒が……」

校長がいいかけるのを、教頭は腰を浮かし気味に、あわただしくさえぎった。

「いやいやいや、その点はご心配ないと思います。青鹿先生はなにしろたいへん優秀な方で、クラスの運営能力にかけては、つとにわたし信頼しておりますし、それはもう絶対にくまくちゃっていただけだと思います、はい。それに、青鹿先生には、すでに事情を説明しまして、ご了解を得ていることですので」

「それならよろしい。ま、いろいろむずかしい点もあると思いますが、なにぶんよろしく」

と、校長はあっさりいった。

「青鹿先生、どうも貧乏クジをひいたようですね」

校長室を退室したあと、こっそりと田所がいった。

「どうやら、あのふたり、胸に一物ありますよ。羽黒一党をクラスにかかえた青鹿先生に、問題児を押しつけたやり口には。これは、一混乱免れませんかあ」

「おどかさないでくださいな田所先生」

と、青鹿晶子はいった。「ビクビクしているんですから」

まったく、校長と教頭はよく出来た組み合わせだ、と彼女は思った。策師の教頭と、老獪教育家タイプの校長。キツネとタヌキのコンビだ。

「絶えず監視を怠らぬことですな。なにか問題が発生する前に、手をうつことです。よからぬ徴候が見えたら、すぐわたしの方にも知らせてください。対策を考えましょうや」

「よろしくお願いいたしますわ。なにぶん未熟者ですから」

「それにしても、青鹿先生はいい度胸をお持ちだな。ほかの先生方だったら羽黒だけでもノイローゼになりますよ」

女子大生みたいな、あどけない顔をしてるくせに、と、田所は感嘆した。これだけの重荷を押しつけられながら、

平然として、動揺の気ぶりもない。

「あたくし、すごく呑気なんです」

と、青鹿晶子はこたえた。

内心は、それほど呑気に構えているわけではなかった。そんな問題児を迎えた、羽黒一党の反応を考えると、なにやら空恐ろしくなってくる。セツトされた時限爆弾がセコンドを刻みだしたような気分だった。

そんなわけで、おれと再会したときの、青鹿晶子の顔は、ちよつとした観^みものだった。おれは、提出した家庭調査カードに写真を添付しなかったし、彼女は、おれの顔を知らなかったのだ。

「あなたが、犬神明……さん？」

彼女は絶句した。眼を大きく見開き、まじまじとおれを凝視した。

「あなたが転校生？」

おれもすぐに、青鹿晶子の顔に気づいたが、知らぬふりをきめこんだ。知らぬ存ぜぬを押し通すほかはない。

「あなたは、あのときの……」

「なんのことでしょうか？」

おれはとぼけた。彼女の異様な態度は、職員室の注意を

集めていた。

「どうしたんです、青鹿先生？」

と、近くの教師が声をかけた。

「その転校生は、先生の親の仇かたきですか？」

笑いが湧いた。

彼女は、おれを職員室から連れだし、ひと気のない音楽教室に連れこんだ。

「あなたを、おぼえていたわ」

彼女はいった。

「すぐに思いたしたわ。まさか、学校で逢うとは、夢にも思わなかったけど……」

「なんのことだか、すこしもわかりません」

おれはいった。「おれは、先生にお目にかかるのは、今日がはじめてだから。もちろん先生が、おれをおぼえているはずはない。なにかの思いちがいでしょう」

彼女は、おれを不信の眼で見た。

「あたしはとても記憶力が発達してるのよ。一度見た顔は忘れないわ」

「他人の空似そっくりということもありますよ」

「なぜ、とぼけるの？」

彼女はきつい声をだした。

「あたしに、喧嘩の現場を見られたから？」

「なぜ、とぼける必要があるんです？ それにおれは一度も喧嘩なんかしたことがない。気が弱いんでね」 おれは

ニヤリとした。

「あなただって、ほんとに一筋縄じゃ行かない子ね」 彼女は唇を噛んだ。「話かたきに聞いた通りだわ」

「あまり目の仇かたきにしないでください。まったく、転校早々、きれいな先生にいじめられるとは思わなかったな。先が思いやられる」

「ごまかさないで……口が達者なのね。そうだ、どうしてもシラを切る気なら、考えがあるわ」

「どうするんです。拷問ですか？」

「ばかね。服を脱いでごらんなさい、犬神さん」

青鹿晶子は、眼を光らせていった。

「えっ いま、ここで？」

「そう。いま、ここで。あなたは、あるとき怪我をしたはずだわ。ナイフでおなかを刺されて……あれから三日もたっていないわ。もし、あのとときの少年があなただだったら……」

「腹にヘソがふたつあるというわけ？」

「そういうことね」

彼女は勝ちほこったような眼つきで、おれを見ていた。自信があるのだ。

「どうなの？ これでも、あたしと初対面だと主張するつもり？」

「いいです。脱ぎましょう。転校早々裸にされるとは思わなかった。全部脱ぎますか？」

おれは、ズボンのベルトに手をかけた。

「上だけでいいのよ」 彼女はあわてていった。顔をあからめていた。

「ねえ、ほんとに脱ぐ気？」

「先生が、そう命令したんですよ」

おれは、手早く上衣とシャツを脱ぎすてた。

もちろん、腹筋のしまった腹の皮膚には、傷痕ひとつ残っていないかった。

「いかがです。ご満足ですか？」

「おかしいわね……」

青鹿晶子は首をひねって呟やいた。確信が失せていった。どうにも納得が行かないという表情だった。

「もつと脱ぎましようか？」

「やめて。もう沢山……なんだか、わけがわからなくなっちゃったわ」

彼女は、気が抜けたように手近にあった椅子に坐りこんだ。額に手を当てていた。

おれが服を着ていいかとたずねようとしたとき、音楽教室のドアが開いて、女生徒がひとり首を突きだした。カワイコチャンだが、やや不良少女ズベッコウがっている。男を挑発するような眼つきをしていた。

「ああら、なんだか知らないけどカツコイイ」

と、女生徒は叫んだ。

「なにしてんの、このひと？ ノードになっちゃってさ」

青鹿晶子は、間の悪そうな表情になった。

「身体検査さ」 おれはいった。「いま終わったところだ」

「へえ？」 女生徒は興味深げに近寄ってきた。「あんだ、だあれ？」

「今度転校してきた、犬神明君よ。こちらは新しいクラスメートの小沼竜子さんといって……」

青鹿晶子がいいかけるのを、女生徒はひったくった。

「お竜と呼んでよ。あんだ、わりと可愛いじゃん？」

少女は、おれの周囲をぐるりと一周して、おれを検分した。

「あんまり強そうじゃないけどさ。それともすこしは自信ある？」

「ないね。強そうなのは、あだ名だけさ。ウルフというんだ」

竜子はふきだした。

「ウルフだって、カツコつけちゃってさ」

おれもニヤニヤ笑っていた。

「大巾にイメージ狂っちゃったじゃない。狼にしちゃズッコケてるわね」

「さあ、もう教室へいらっしやい。授業が始まるわよ」

青鹿晶子がいった。「小沼さん先に行つて。先生は犬神君と後から行きます」

「わかったわよ」

竜子はうるさそうな顔をして、はなれて行った。

「また、あとで逢おうね、ウルフ」

おれに親密そうな笑いを投げて、音楽教室を出て行った。「あの娘、あなたが気に入ったらしいわ、犬神さん」と、青鹿晶子がいった。

「そうですか？」

「だけど、注意しておくけど、絶対あの娘に近寄っちゃダメよ」

「おれは女には興味がないんです。まだ思春期前なんですね。だけど、なぜです？」

「トラブルが起きるから……」

彼女は浮かぬ顔でいった。

「トラブルには慣れてますよ。なんとも思わない。けど大丈夫。おれは小羊みたいにおとなしいから」

彼女の懸念は、すぐにピンときた。しかし小学生時分から二十数回転校をくりかえしてきたおれだ。手荒らな転校生歓迎会には、いい加減食傷していた。

だが、おれを迎えた教室の雰囲気は、たしかにちよつとしたものだった。沈黙が期待をはらんでいた。

青鹿晶子がおれを教壇に立たせ、紹介にとりかかって間もなく、飛んできた切出しナイフが、おれの頭を掠め、背後の黒板に突き刺った。

「神戸から転校してきた犬神明です」

おれは、ぎよつとして絶句した青鹿晶子をよそに、超然

と自己紹介にスイッチした。おれは、この程度では驚かない。たかがチンピラ中学生のデモンストレーションに度肝を抜かれるようでは、狼男は務まらないのだ。

全員が、固唾を呑んで、おれの反応を注視していた。うす笑いを浮かべている顔もいくつかあった。脅えている顔、緊張している顔、面白がっている顔。

いずれも、この挑発を、おれがどう受けるか興味しんしんで待ちかまえていた。

青鹿晶子の表情は、怒りと懸念の色が入りまじっていた。彼女が口を開く前に、おれはひよいと手を伸ばして、黒板から切出しナイフをひき抜き、刃を折りたたみ、テーブルの上に置いて教壇を降りた。

とくに、どうということもなかった。

空いている席を見つけて坐った。その隣席に、例の小沼竜子という女生徒がいた。それだけのことだ。

教室中の全員が、首をねじ曲げて、おれを見ていた。まるで、おれの坐った席に時限爆弾でも仕掛けてあるかのような、大げさな関心の持ち方だった。

たしかに、その通りだった。竜子は面白そうにおれを眺めていた。

はたから見ていれば、さぞかし、スリリングな光景だったにちがいない。虎の留守中にその洞穴へ入りこんだ馬鹿を見ているような気分だったろう。虎が帰宅したあとの騒ぎが観^みものというわけだ。だれも、おれに忠告してくれる人間はいなかった。だれもが意味ありげな沈黙をまもっていた。

「ね、ウルフ。あんた、そこにずうっと坐ってるつもり？」 と、隣席の竜子が訊いただけだ。

「ああ」 おれはいった。「向うに行ったほうがいいか？」

「あたしは、べつにかまわないけどサ」

竜子は面白そうにいった。「ただ訊いてみただけ」 横を向いてしまった。

そいつは、昼休み近くになってから、教室に姿を現わした。筋肉質のたくましい身体つきをした、大柄な少年だった。顔つきは鷹を連想させた。凶暴で暗い翳りを漂わせていた。抜身の刃物の凄みを感じさせる危険な印象だ。

暴力のプロに共通した、一種物質的な迫力を身につけていた。いわゆる蛇の眼をした連中のひとりだ。こういう奴は、非情な冷血タイプで、自分の母親が血を流していても、動ずることがない。情緒麻痺の変質者で、虫をすり潰すよ

うな気軽さで、他人を傷つける。戦闘力を喪失した相手を、平然と蹴りまくることができる奴だ。

たぶん、非行少年としても、大物にちがいなかった。非行少年というのは、だいたいにおいて、激情タイプが多く、すぐカツとなるくせに、性格が脆い。それにひきかえ、冷血性格の偏執者となると、これは本物で、大の大人でも威圧されてしまう。特殊な暴力的な雰囲気を放散しているからだ。

おれも、荒っぽいことにかけてはプロだから、こういう手合は何人も知っていた。

社会科の教師は、そいつをとがめようとする気配も見せなかつた。精いっぱい愛想笑いすら浮かべていた。生徒を恐らせていて、自己保身のために、やたらに愛想がよく、ゴマをするタイプの教師だ。

「ありやあ。これはこれは、どうもどうも、最近ちつとも顔を見なかつたけども、身体でも悪くしてたの、ん？ ま、いいでしょ、お入りなさいよ、ね、授業中なんだから」

教師のセリフではない。もみ手をしていた。そいつは、教師を無視した。教師を透して黒板が見えるような一瞥をくれただけだった。鳥か爬虫類そっくりの無表情な眼を持っていた。気違いの眼だ。

戸口にうつそりと凶悪な気配を漂わせてたたずみ、サイコな眼を、おれに向けていた。おれを執拗に凝視していた。おれも、サイコの眼を見返した。こんな眼のつけ方をさ

れたら、とうてい無事ではすまないとわかっていた。邪悪な害意の表現だからだ。言葉よりも雄弁だった。

その眼つきは、おまえのキンタマを切りとってやるぞ、と語っていた。

「どうしたの、羽黒君？」

と、ゴマすり教師がいった。

「そんな所に立ってないで、坐りなさいよ、ね？ どうかしたの？ なにか気に入らないことでも……」

そいつは、口もきかず、くるつと背を向けて教室を出て行った。

またしても、全員の視線がおれに集まっていた。前列の席の生徒などは、身体をねじ曲げて、おれを振りかえっていた。

教室を充たした沈黙が、なにを意味するのか、やっとおれにもわかりかけてきた。

昼休みになった。

おれに話しかける者はひとりもいなかった。おれは、空になった教室にひとり坐りつづけた。

たしかに、なにかが起きかけているにちがいない。だれもが知っていることだった。

気配でわかった。教室後部の戸口から、だれかが首を出

して、おれを覗いていた。

頭をめぐらせると、あわてて首をひっこめた。おれは、そのままの姿勢でしばらく待っていた。

やがて、そろそろと頭のとっぺんが覗き、臆病そうなクルクルキョトキョトした眼が続いて現われた。おれと眼があうと、いそいで隠れてしまった。

また首を出すにきまっているので、おれは待ちつづけた。小心な好奇心の強い小動物そっくりの動作で、再び顔を覗かせるのを待つて、おれは呼びかけた。

「隠れんぼは、それくらいにしたらどうだ？ なにか話があるんだらう？」

そいつは、おずおずと躊いがちにやってきた。小柄でひよわそうな少年だった。耳がばかに大きく、前歯が目立つ。栗鼠とかビーバーを想わせる顔をしていた。動作には落ちつきがなかった。

「あの」と、彼はいった。おれと視線を合わせるのを恐れているように眼を伏せ、栗鼠が前脚でクルミをいじるような具合で、両手の指先をしきりにこすりあわせていた。

「あの……あのう……」

「どうした、オシッコでも行きたいんじゃないのか？」

おれは訊いた。チビはびっくりして眼をまるくし、首を横に振った。それでも、いくらか勇気が湧いたらしい。

「あのう……へんなことを聞くようだけど」

「かまわないよ。なんでも聞いてくれ。身長は一六七センチ、体重五五キロ、バスト、ウエスト、ヒップのサイズも教えようか?」

「いや、そんなことじゃなくって……」 チビは眼をパチクリさせた。「あの、きみのいま坐っている席のことなんだけど、そこ、他人ひとの席だってこと……知ってる?」

「ああ」 おれはいつた。「羽黒って奴の席だ」

「なんだ、知ってたの。おれ、きみが知らないのかと思つて……」

「教えに来てくれたというわけか。それはどうもご親切に」

「すぐに席を移った方がいいんじゃないかなあ……羽黒、きつとすぐく頭に来てるよ」

心配そうな声だった。

「羽黒って、どんな奴だ? 番長って奴か」

「そういうのとちよつとちがうんだけど」

チビはささやいた。「羽黒のおやじは、暴力団の大幹部なんだ。だから羽黒には、すごいヤクザが大勢ついてるんだよ」

「なるほど。ただの番長とはわけがちがうってことか」

「先生だつてなんだつて、羽黒には手が出せないんだよ。」

だから、羽黒は学校へ来て、やりたいほうだいなんだ。不良の子分はいっぱいいるしね……」

「おっかない奴らしいな」

「怒ると、なにをするかわかんないよ。前に、学校の近くの家に、でかいシエパードがいたんだ。そのシエパードに吠えられて、羽黒は頭に来てね、家から日本刀を持ち出して、シエパードを切り殺しちゃったんだ……その上ヤクザが来て、犬の飼主から何十万円も脅しとつたんだって……」

チビは恐怖の色を眼に浮べていた。

「羽黒は、きつときみになにかするよ。でも殴られても、てむかいしないであやまったほうがいいよ。でないと、なにをされるかわかんない……羽黒は短刀を持つてるし、学校にピストルを持ってきたことだってあるんだ」

チビは言葉をとぎらせ、まじまじとおれの顔を見詰めた。
「きみ、こわくないの？　こんな話を聞いても……全然こわがってないみたいだ」

「こわくてふるえてるよ」　おれはいった。「あんまりこわいんで、動くこともできない。だから、このままこの席に坐ってることにするよ。そう羽黒に伝えてくれないか」

チビは眼をそらした。居心地悪そうにもじもじしていた。おれは笑いを吹きつけた。

「羽黒にいわれて、おれをビクつかせに来たんだろ？　え、ちがうか？　なかなか芝居が達者じゃないか……感心したぜ」

チビは、ふてくされたような顔になった。気弱そうな仮面が失せ、したたかな素顔がむきだしになった。顔はおな

じ兎うさぎ面めんでも、肉食性の兎ほどの相違があった。

「わかったよ」 チビは不逞な声をだした。「油断のならねえ奴だな、おめえは。けど、なぜ、わかつたんだ？」

「おれは鼻が効くんだ。さっき切り出しナイフを投げたのはお前だろう？ 匂いでわかつたのさ。ナイフの持主の匂いをぶんぶんさせてるからな」

「あきれた野郎だ。まるで犬みたいな奴だな、おめえは。犬神なんて名前を持つてるだけのことはあらあな」

「その通りさ」

「けど、いまおいらの話したことは全部嘘じゃねえぜ。日本刀で犬を切り殺した話もな。犬の首が三メートルも吹つとんだんだぜ。おめえもそうならねえように気をつけな。そのうち、おとしまえをつけるからよ」

「そう凄むなよ。あんまり脅かされると、今夜あたりおねしょをしそうだ……あなたの癖が、おれにもうつちまうよ」

おれはニヤニヤしながらいった。チビの顔がまっかになり、癩癬の青筋が浮いた。

「この犬ツコ口野郎、いま、なんといった？」

「おれの鼻はすごく効くといっただろ？ 夜尿症ぐらいすぐにわかる。肌に小便の匂いがしみついてるからな」

チビは罵声を漏らした。手の動きはすばやかった。ナイフがおれの頭を掠め、髪の毛が幾筋か切断されてパツと空に舞った。おれは身動きもせず瞬きすらしなかった。

「ナイフ投げも達人だな。たいしたもんだ」

「当りめえよ。いまに、その眼玉にブツ通してやるからな。覚悟しとけ」

「せいぜい練習して腕をみがくんだな。ネズミ退治ぐらいには役に立つだろうぜ」

おれは、退場して行くチビの背中に浴びせかけた。チビは獰猛に前歯を剥きだして威嚇して見せ、姿を消した。

その日の放課後、おれは第一回目のおもてなしを受けた。おれを校舎の屋上に誘いだしたのは、小沼竜子だ。

「ちよつとつきあつてよ。ウルフ、あんたと話したいことがあるの」

そんな気軽な調子だった。腕をからませてひっぱつて行く。ふりはなして逃走するわけにもいかなかった。

「あたし、あんたにすごく興味持つちゃったのよ。あんたのことを、もっとよく知りたいんだ」

甘えるように身体をすり寄せてくる。仔猫みたいに可愛らしく無邪気に見えたが、意図は別にあつて、おれも承知の上だった。

屋上には、半ダースほど待ちかまえていた。竜子が腕をほどいてはなれるなり、背後から襲ってきた。唸りを生じて、野球のバットがおれの背中を強打した。おれはせいぜ

い派手にぶっ倒れた。

「悪く思わないでね、ウルフ」

竜子は無邪気そうに笑いながら、おれを見降した。なんの罪悪感もない表情をしていた。

「あんたをだましちゃったわけだけどさ。あたし、ウルフがどれくらい強いかわかったんだ。きつと相当、実力あるわよね？」

「強そうなのは、あだ名だけだといつたる」 おれはいい返した。「なぜ信用しない？」

「勘よね。あたし、みんなと賭けたんだ。あんたが三人まで相手にしてやつつけられるって……」

「こいつらを、おれにけしかけたのはおまえか」 おれはげっそりした。

「まあ、そうね。さあ、早く起きてよ、いつまでも伸びてないで」

「どうでもいいけど、そんな所に立っていると、スカートの中がまる見えだぜ」

おれは、すらりと伸びた足を見上げながらいった。パンティがまともに見えた。

「それどころじゃないわよ。ウルフ、あんたが三人やつつけないと、あたし、みんなにストリップして見せなきゃならないんだから」

あきれた話だ。おれは身を起して坐りこんだ。

サイコな眼つきの羽黒は、腕組みをして、屋上の小屋の

壁に、肩で寄りかかっていた。他の五人に比べて、たしかに一段と凄みがあった。

例の兎面のチビが悪意に眼を光らせているのが眼に入った。

「さっさと起きな、犬ツコロ」チビがいった。

「おまえがストリップしようとしまいと、おれには関係ない」と、おれは童子にいった。

「とにかく、この場はただじゃすまないだろう。好きなようにするがいいさ。だが、チンピラ相手の喧嘩はまっぴらだね」

おれは立ちあがった。

「殴られ役専門の役者みたいに、すぐくうまい具合に転んでやるよ。そのかわり、おれを徹底的にのしちまうのは骨が折れるかもしれないぜ」

おれの軽口は、一同の胸くそを悪くさせたようだ。彼らはおれを憎んだ。

「ほざくな、痩せ犬」

兎面のチビが喚いた。

「いい気で、おちよくってやがるとおっ」

おれはよってたかつてぶっ倒された。奴らは非常に熱心だったので、じきに指の関節をくじき、足を痛めた。バツトは数回目の殴打で、まっふたつに折れた。

連中に見れば重労働だった。息をきらし、汗を流して、奴らは手を休めた。

月齡が熟し、体力の充実期にあるおれにとっては、どうということもなかった。

羽黒は、手下どもが荒仕事に励んでいる間中、硬玉のように非情な眼を光らせて、壁にもたれかかり、傍観していた。

「もうこれで種ぎれか？」

おれはうつ伏せに寝そべったまま、連中をゲツソリさせるようなセリフを吐いた。

「これくらいでへたばるようだと、根性がないといわれるぞ」

肩で息をしながら、連中は顔を見あわせた。そのとき、羽黒がはじめて行動を起した。ゆっくり、倒れているおれに歩み寄ってきた。

「しぶとい野郎だ」 羽黒は鷹のように無表情な顔でいった。

「度胸もある。だが、これだけの目にあわされて、なぜてむかいをしねえんだ？」

「教えてやろう」 おれはいった。「おれは狼だ。だから、おまえたちのような、ひねた性悪な野犬どもに牙はむかない。おまえたちにはその資格がないんだ。わかったかね」

「ちっ しゃれたことを吐かしやがって……」

羽黒は呟いて、おれの首筋に靴を載せた。ぐつと体重をのせて踏みつけてきた。

「首の骨が折れてくたばってもか、え？」

「おれを徹底的にのすことはできないといったろ？ プロレスの馬場をノックアウトする方が楽だぜ」 おれは笑った。

「野郎、キンタマを切りとってやるつか」

と、兎面が凶暴な声を出した。「もう我慢ならねえ。だれかズボンを脱がせる。おいらがやってやる」

手に登山ナイフが光った。

「やめろ」 羽黒はいつて靴をおれの首からどけた。「こいつの相手はおれがする。だがいまじゃねえ。こいつが、その気になったときだ……」

「十年もたって、一人前の悪党になったらこいよ。それまで待つてやる」

「クロ、ナイフをかせ。記念を残しといてやる」

羽黒は兎面からナイフを受けとった。彼がやったのは、ナイフの刃先で、おれの背中に犬という字を彫りこむことだった。

「いい記念になったろうか……腹が立つたらいつでも来な。でかい口をたたけないようにしてやるぜ」

連中は屋上から立ち去った。おれは、コンクリートの床に顔を押しつけたまま倒れていた。

しばらくして、ひとりだけの足音が戻ってきたとき、おれは両手で顔をおさえ、足音に背中を向けて立ちあがった。
「ウルフ……」

竜子の声だった。声音には気遣わしげな響きがあった。

「大丈夫？ ごめんね、あたし……」

「こっちに来るな」

おれは顔をおさえた指の間から鋭い声を出した。

「向うへ行けっ」

「ウルフ……」

「うるさい。行けといったら行けっ」

竜子に、いまの顔を見られるわけにはいかなかった。おれの顔には変態が始まっていたからだ。

とんでもない時に、メタモルフオーゼ変態が起きてしまった。月がまるい時期といっても、いまはまだ月齢十二日だ。決定的な生理的变化が生じるにはまだ早すぎる。月齢十五日の満月には、三日も間がある。

羽黒一党のふるった暴力が、倒錯的な末梢神経の興奮を呼んで、メタモルフオーゼの時期を早めてしまったようだ。しまった！

おれは両手で覆った掌に、ブラシの毛先のような剛毛の触感を意識した。明確な変貌が始まっていた。この異様な顔を、小沼竜子に見られるわけにはいかない。メタモルフオーゼが始まった人ひと狼おおかみの顔は、かなり怪奇趣味でシヨツキングなのだ。気の弱い人間なら、ひきつけを起こすだろう。

おれは顔をおさえたまま、竜子に背を向け遠ざかろうとした。が、ここは屋上だ。逃げ隠れはできない。唯一の出入口は、竜子によってふさがれている始末だ。

「ウルフ、顔に怪我をしたのね?!」

竜子の声は狼狽していた。

「ひどい怪我なの?!」

そうでもないともいえない。

「なんでもいい。おれに構わないでくれ。向うに行け、行けつたら」 おれは喚いた。

「たいへん……ウルフ、ちょっと待ってて! いま、だれか呼んでくる。そこにじつとしてて!」

「おい、待て。やめろ……」

竜子は聞いていなかった。身をひるがえして、通路の階段を駆け降りて行った。

面倒なことになった。だれか呼んでこられたら、おれの立場はますます厄介きわまりないことになる。

こうなったら、逃げ道をのんびり選んでいるわけにはいかない。校舎は四階建てで、下は堅牢なコンクリート床だ。おれは屋上のですりから身を乗りだし、眼下の空間を覗いた。かなりの冒険だが、もつとせっぱ詰まって荒っぽい行為に出たおぼえは何度もあった……おれは跳んだ。

その時、階段を駆け降りた竜子は、女教師青鹿晶子とばったり顔をあわせたところだった。青鹿は、犬神明が羽黒

一党に連れ去られたという情報を、受持クラスの生徒から仕入れて、校内を探している最中だったのだ。

竜子は火がついたような勢いでとんできて、女教師の腕にしがみつки、ゆすぶった。

「せ、先生、たいへん！ ウルフが怪我を」

「ウルフ？ 犬神君が？」

青鹿は、危惧が的中したことを知った。

「こつちへ来て！ 屋上よ」 竜子は叫びたてた。「すごい大怪我！ 顔がメチャメチャなの！」

青鹿晶子は、ものもいわず、階段を走りあがって行った。竜子も後に続いた。

が、ふたりが屋上に走り出たとき、そこに犬神明の姿はなかった。

人影も見当らなかった。

「犬神君はどこ？」

「いないわ。おかしいわねえ。いまさっきまでここにいたんだけど」

探してみたところで、無駄だった。犬神明は屋上から消え失せていたのである。

「へんだなあ。階段を降りてきたんなら、途中で行き逢うはずだし……」

竜子は唇を咬んだ。困惑の表情だった。

「もしかすると、屋上から落っこちちゃったんじゃないかなあ……」

「へんなこといわないで！」

「でも、落ちたんなら、下でペシャンコに潰れてるはずよね」 竜子はろくでもないことばかり口にした。

「先生、どこにも潰れてないわよ」

青鹿晶子の胸中には、再び芽を吹いた疑惑がふくらみ、育ち始めていた。

あの新宿で出逢った奇妙な少年。チンピラに刃物で腹を刺されながら、苦痛を見せることもなく、平然と彼女を見返していた、犬神明そっくりの少年。その少年は、パトカーが駆けつける直前、煙のように唐突に消え失せたのだ。

その少年は、しかし、犬神明ではなかったはずだ。なぜなら、腹部を深くえぐった刃物の傷は、犬神の滑らかなひき締った腹には見出せなかったのだから……

が、犬神明は、たったいま、逃げ場のない屋上から奇妙な消失ぶりを見せたのだ。あの少年の鮮やかな消え方と、実によく似ていた。

ひよっとすると、あの少年はやはり犬神明と同一人物ではなかったのだろうか？

あの冷やかに澄んだ眼、奇妙なほど誇り高い表情、美しい野獣のような軽い身のこなし。妖しい精悍な魅力。それらは、彼女にかすかな戦慄を感じさせずにはおかなかつた。見まちがえるはずはなかったのだ、と、彼女は異様な昂ぶりに心身を支配されながら思った。

あの少年は犬神明なのだ。たとえば、彼が否定し、腹の傷

痕があるうとなかろうと、そんなことは問題ではない。

とにかく、犬神明には、得体の知れないミステリアスなところがある。常識を超えた神秘性を、その肉体にも、精神にも秘めているのだ……

それがなんであるのか、わたしは知りたい！ あの強烈なプライド、謎めいた魅力の原泉をこの手で突きとめたい！ そして、彼が何者なのか知りたいのだ。

青鹿晶子は、熱望に駆られて両手をもみしぼっている自分に気づいた。

暮れなずむ空には、円盤状の月が浮いていた。異様に生なましく、露骨な感じのする月だった。なにかしら心を奇妙に昂ぶらせ、衝動をさそう

「どうしたのさ、先生？」

竜子が不安そうにいった。「これから、どうするの？」

「ちよつと待って……あの声はなにかしら？」

青鹿晶子は身体をかたくし、耳をそばだてた。

それは、美しく妖しい、野性的で神秘的な遠吠えだった。ユーユーユーオーームールールーウムー ムー
ン、オー

「なんだ、犬の遠吠えじゃないの」

と、耳をかたむけていた竜子がいった。

「犬の……でも、あんな声聞いたことないわ」

「うす気味悪いけどでも、きれい。なんだか背中がゾクゾクしてきたわ」 と、竜子がブルツと身ぶるいして呟やい

た。「なんだかこわいみたい……」

「まるで、狼の遠吠えみたいね」

青鹿晶子は、背筋を戦慄の波動が這い、毛が一本一本立ちあがって行くような気がした。

遠く近く、そこかしこで、犬が吠えはじめた。けたたましく、騒然とした叫びが波及して行く。

妖しい遠吠えがとだえたあとも、犬たちの叫喚は続いていた。

青鹿晶子は、犬たちの吠え声に、恐怖に脅えた警戒の響きを聞いたように思った。

狼の遠吠え？ まさか……

彼女は自分の考えの突飛さに驚きをおぼえ、へんにゾツとして、再び身をふるわせた。

狼……みずから狼ウルフと名乗る、野生の息吹きを感じさせる少年、犬神明。なにかしら息苦しい思いで、青鹿晶子は、少年の瘦せぎすのしなやかな肉体を脳裡に蘇らせていた。

ウルフガイ

漫画原作原稿 第1回 デジタル版

発行日 2000年6月25日

著者 平井和正

イラスト 坂口尚

デザイン ルナテック

発行 有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, HISASHI SAKAGUCHI,
LUNATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。